

---

# 空の境界 完全斯界ファントムズ

南回転

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の境界 完全斯界ファントムズ

### 【Nコード】

N0294Z

### 【作者名】

南回転

### 【あらすじ】

奈須きこの原作の『空の境界』の二次創作作品となります。原作完結から約2年後を想定した、短編連作形式の嘘続編です。原作の展開を強く意識しつつも、オリジナル、オリジナル要素を含みます。二次創作においてのオリジナルが苦手な人はご注意ください。

矛盾点、誤字脱字、行頭、行間の乱れ、ルビ等、こちらでも見つけ次第対処していきますが、もし発見しましたら教えて頂けると幸いです。もちろん感想もお待ちしております。

## 序章

序章 1999年 3月

目覚め自体は悪くなくいつも通りだったが、そのとき目に映ったものはどれも見覚えがなく、おれは最初に警戒をしなければならなかった。

白い照明、白い天井、白いベッド……淡いグリーンのカーテン以外は、大抵が白いもので出来ている部屋だ。薬品の匂いもするし、すぐに病院だと分かる。

問題はこれからだ。何故おれが病院にいるのか、その理由が分からない。思い出せない。いや、思い出せないぐらいショッキングなことがあったからこそ、問答無用で病院の一室までやってきたということがあるのか。

じゃあ、今のおれはどんな状況で……何が以前と違うのだろうか。それを知らないと、現実を埋め合わせることは出来ないが、考えたところで分かるものでもない。

妙に冷静な自分を、不毛な思考で焦らしていると、唐突にドアが開いた。

部屋は個室のようだったが入室に際して、一言の断りもない。

現れたのは、白いシャツにオレンジの外套を手に提げた、派手なのか地味なのかケバいのがよく分からない女だった。何を目指しているのかは不明だが、お世辞にもお洒落とは言えない感じた。

そんな、似合っているとは言いがたい格好に反して、問題なく美人の部類に入る顔と、それに掛けられた眼鏡だけは、完成品と呼べるほど似合っていた。

印象的な、奇妙な女だった。

「あんたは？」

おれの問いに対して、返事はすぐになかった。女は病室を興味な

さげに歩き、無遠慮な動作でベッド脇の丸椅子を引いて、おれの前に座った。座るとき、服から微かにタバコの臭いがした。

「君の……そうね、安っぽくても分かりやすい言葉を使うなら、命の恩人つてところかしら。もっとも君は一人でも生きていただろうから、表現としては適切ではないけど」

「はあ……」

「私は行方不明だった君を発見した人よ。救ったわけではないけど、あのままだったら、社会的に死んだも同然だったろうから、感謝される謂れはあるかもね」

恩を着せようとしているのか、そういう冗談なのか判断できない。もしかしたら、そういう謎っぽさを武器にして生きている女なのかもしれないと思った。

とにかく、この女が今のおれがここにいる理由に大きく関与していることだけは間違いないようだ。

「……行方不明」

「ええ、ほとんどの人間が死体になっていた事件。君の家族も含めてね」

一度で理解できることを言わない女だった。すぐには飲み込みきれない事を淡々と口にする。

ショックを受けるよりも疑念が先だった。お袋がそう簡単にくたばると思えなかったのと、この女の抜群の胡散臭さのせいだ。

裏があるのは間違いない。この女の心理だけではなく、今の状況を作り出している要因全てに。

だが、それを追求する事はせずにおいた。知ってもどうする事も出来ないと分かるくらいには冷静だった。

「それでおれに何の用なんだ？ お袋が死んだって伝えに来るのは、恩人の仕事じゃないだろ。葬儀屋つてわけでもなさそうだし。言っちゃなんだが、あんたは疑わしい」

そう言った途端何がおかしかったのか女は俯いて、くつくつと茹だったように含み笑いを始め、我慢できなくなったのか噴出し、し

まいに大口開けて破顔した。

「疑わしい、ははっ、疑わしいね。確かに。いやあ、まいったわね。君はまったく予想以上に、ねえ」

一頻り笑い終えた女は居住まいを正して、再びおれに向き直った。

「私は蒼崎橙子<sup>あおむぎとうじ</sup>。名刺はある？　って切らしてたか、そういえば前も切らしてたような……」

手に持っていたコートのポケットを漁って、レシートを一枚取り出した女は、その裏に自前のボールペンで『蒼崎橙子』と自分の名前を書いておれに寄越した。

たおやかな物腰とは裏腹に、不誠実な人間なのは疑いようもない。

「職業は人形師ってことにしておきましょうか。他にも建築とか、たまにカウンセリングとかもやってるけど、本業はそれ」

本業と副業に繋がりがなさ過ぎて、リアクションに困る。怪しい。

「君の名前を聞いてもいい？」

即答は出来なかった。自分の名前がすぐに出てこなかったからだ。

「桃園寺<sup>とうえんじ</sup>、梓記<sup>しき</sup>」

蒼崎が頷いて初めて、おそろおそろ口にした名前が、本当に自分の名前だったのだと安心することが出来た。

「名前以外に何か覚えていることは？」

お袋の性格とか、自分の年齢とか、高校中退してフリーターだったこととか……断片的な情報はあるが、記憶として上手く絵にはならなかった。

「記憶に混乱がある？」

正確には混乱というよりも、抜け落ちているような感じだったが、記憶が記憶の役割を果たしていないなら、どんな言い方をしたって一緒だ。

認めざるを得ないだろう。おれは頷いた。

「そう。でもね、それは代償としてはずっと安い、とも言える。記憶が人の外延がいえんをなすものとして、決して小さくない意義を持っているとしてもね。命があることを思えば、ね。桃園寺くんが巻き込まれた事件っていうのは、細かい内容は言えない決まりなんだけれど、およそ助かるような事件ではなかった」

目を逸らさないまま断言する、蒼崎の言葉の裏側には、自身もその事件とやらに關つていたという含みがあつた。

「社会的に人間的に根源的にも抹殺されて、人為的に覆い隠さなければ、場合によって致命的な何かが崩壊する、そういう事件だった」  
しかし、流石に大げさだろ。

「それでも、君はここにいる。間違ひなく生きている。私は恩人だからではなく、そんな君に興味があつたからここに來たの。それで納得してもらえる？」

「納得も何も、あんたがそういう言うならそうなんだろ」

「そうね。君が決められる事ではなかったわね」  
もつともだと言わんばかりに、蒼崎は頷いた。

「まあ、身寄りのないこれから一人で生きていかなければならない君を、自称恩人として手助けしてあげよう、なんて考えてもいるのよ？」

「それは、善意じゃなくて、あんたの個人的興味の延長だと受け取つた方がいいのか？」

「退院したら行くところないでしょう？ 君が住んでいた家はもう取り壊しが決まっているしね。私の個人的な意思是、今の桃園寺君が問題するべきところなのかしら？」

「選択肢はないか」

「施設に行きたくなかつたらね。あの場所こそ、純然たる善意なんて存在しない場所だと思ふんだけど」

どうする？ と蒼崎は首を傾げた。その仕草は、服装のセンスや胡散臭さを差し引いても、十分魅力的な部類だった。騙されてても

いいかな、と思うぐらいには。

一週間ほど無為な時間が過ぎた。

身体的に異常が無く意識があれば、精神を専門としてない病院からは追い出される。居心地の悪いベッドに拘束される生活ともこれでお別れ。名残を惜しまないでもないが……素材良さを一度踏みにじつてから調理したとしか思えない、破壊力重視の病院食はもう二度と口にしたくないので、綺麗な看護婦さんの思い出だけ頂戴し、後は全部忘れることにした。

何はともあれ退院だ。

体の機能は正常にも関わらず、原因不明の昏睡状態だったおれの門出を、担当医が肩の荷が降りたような安堵の表情で送り出してくれた。

天気は朝から多少冷え込むものの快晴。迎えに来た蒼崎には似合わない空模様だった。

入院中にもこの女は何度が見舞いに来たが、病院食に苦しむおれに一度として差し入れを寄越すようなこともなく、手ぶらでやって来ては、ひたすら気の利かない冗談でお茶を濁していた。

悪党ではないが意地はあまりよくない、というのが現状の蒼崎について固まりつつあるイメージ。

迎えに来た蒼崎は、院内では手に掛けていたきつい橙のコートを着ていて、これまでと少し印象が違っていた。

「それ着てここまで来たのか？」

おれはつい、そんな当たり前のことを聞いた。

「そうだけど、どうして？」

蒼崎は何故聞かれたのか、まったく理解出来なかったようだ。

こういうときはどう言ったらいいのだろう。

『ちよっと違和感ありますよそのコート』

失礼じゃないのは字面だけで、他全てにおいて弁えるべき部分が

弁えられていないので没。

結局、蒼崎のファッションセンスについて言及することは、そのときもそれから先もなかった。大分後になって、彼女が常に橙色を纏う理由を知ったが、それは同時に似合わない理由でもあって、何故と問いかける事も出来なくなってしまった。

それから会話らしい会話も無く、おれは蒼崎の車に乗って目的地に向かった。

何度が見舞いに来たときの話では、『しばらくの間借りられて帰って寝るぐらいには十分な部屋』に案内してくれるとのことだった。

車の中は静かだった。エンジン音とタイヤが路面をなめる音とシートから伝わる振動が、不要な思考を取り払っていく。移動中おれはじつと窓の外を見ていた。風景は大通りから外れ、閑散とした郊外に変わっていた。

規則性のある外観の建物が乱立するいかにもな住宅街の一画で、蒼崎は車を止めてサイドブレーキを引く。

「ここよ」

愛想よく笑って指し示した先は、特になんの異常も無いごく普通のマンションだった。蒼崎の案内だから、もつと胡散臭い場所に連れて行かれるのかと思っていた。拍子抜けした感は否めない。

二人で階段を上がり、振られている番号以外は同一の規格であるドアが整列する中をさらに進む。お目当ての部屋のノブに鍵を差し入れて回すと、何の変哲も無い開錠音がして、その時点ではこれといった驚きも無いまま部屋に通された。

「知り合いの部屋なんだけど、今出払っててしばらく帰ってこないだろうから、好きに使っていいわよ」

「まだ引越してきたばかりって感じだな」

「んー確か住み始めてもう一年ぐらいになると思っけど」  
それを聞いて絶句してしまった。

「一年……」



室内はがらんとしていた、というか何も無いに等しかった。

キッチンが綺麗というよりも明らかに使われておらず、居間にはベッドが一台と、電話が投げ捨てるように置かれている。カーテンリールに着物が下がっている以外に、この部屋に住んでいるという人物の人格を表すようなものは何もなかった。冷蔵庫を空けてみても、水と氷と氷菓（全部ストロベリー）しか入っていない。

およそ人の住んでいる部屋ではなかった。

「あんたの知り合いって、仙人か何かか？」

蒼崎は噴き出した。初めて会ったときから思っていたが、結構笑い声に特徴のある女だ。

「くくつ、君は面白いなあ。しかし、仙人か。浮世離れしてるって意味では、似たようなものかもね」

冷静に考えてもみれば蒼崎の知り合いって時点で、まともな人間である可能性は、ほとんどなかったのだ。それでもおれには、この世界でそれなりに自由に生きていくための手がかりが、蒼崎しかいなかった。

覚悟を決めねばなるまい。

「あ、その着物とか押入れの下着とか、触ったり嗅いだりしちゃだめよ？」

「おまえなあ……」

基本的に蒼崎の冗談には、品性や倫理観が足りない。場合によっては訴えられるぞ。

「一応、うちの署員の恋人の部屋だからね。如何わしい人に貸したなんて知れたら、怒られちゃう」

自分の世界じゃなくて、日本国家の法律や広義の良識にのっとった考え方で、ものを話して欲しいものだと思う。まあそもそも常識のある人間なら、部下の恋人の部屋を人に貸したりはしないが。

手に提げていたバッグから蒼崎はおもむろに、一冊のファイルを取り出して、キッチンに置いた。

「これ、君が昏睡する前に交流のあった人のリスト。電話番号と現

住所が載ってるから、悪事以外のことに使うといいかな」

試しに手に取って開いてみると、馴染みの顔から、よく行っていたコンビニの仲のいい店員まで、膨大な量が事細かにファイリングされていた。ありがたみよりもその労力の質に、寒気すら覚える。蒼崎が調べたのだろうか？　ちよつとした変態の所業である。

「それと、これ」

続けて取り出したのは時計だった。日付表示のあるデジタルの小型置時計。特別のものではなく、普通に市販されているもの。

見渡してみると室内には確かに時計がない。が、生活必需品というわけでもない。気を利かせたわけではなく、もつと別の意図があると判断すべきだろう。

「……君の時計を合わせておかないとな」

そう呟いて、おもむろに部屋の奥に移動した。窓を開けて部屋の中に光を入れる。

逆光の中にいる蒼崎の後ろ姿は、鼻屑目に見ても美人のそれだったが、見とれている余裕は持ち合わせていなかった。

「どういう意味だよ」

「そつえば教えていなかったと思って」  
背を向けたまま蒼崎が眼鏡を外した。

「1998年の春から、君を小川マンションで見つけるまでの間に流れた時間をね」

おれは反射的に渡されたデジタル時計を見ていた。

「せん……九百、九十九……」

現実がすぐに飲み込めたわけではない。何故今までそのことを気にしなかったのか、最初はそればかりを思った。

昏睡していた時間に無くなっていたものが多すぎて、自分の身今まで考えが及ばなかったのか。単に高を括っていたのか。なんて間拔けた。

記憶の一部に混濁があったから。それは言い訳に過ぎないだろう。

おれの記憶はどういう風に掘り返しても1998年までしかない。

それをはっきりと自覚してようやく、一年近くも寝こけたという実感を得た。眠っている間に、自分という実体すら忘れつつあったとでもいうのか。

「長時間の眠り、意識の離反は、自分がここ在るという自信を遠ざけるものだ。しかし何度も言うが、桃園寺。お前はこれから一人で生きていかなければならない」

どうやらタバコを取り出したらしい。ライターのガスの音。それから、大きく息を吐き蒼崎の頭上に煙が上がり、すぐに窓の外の風にさらわれていった。

「お前に限らず、私は他人の生涯にあまり積極的に干渉するつもりも、まして説教をする気も無い。が……あの螺旋の中から、どうやって這い出てきたのかには興味がある。お前の生きている理由にね。それを知るまでは呆けて貰っては困る。明確な根拠はないが、お前は現時点で『こちら側』の人間だからだ。望まなくても、向こうから何かをやってくるだろう」

「あんたは……」

デジタル時計を握り締めたまま、おれは今の今まで何度と無く思い、そして一度は口に出した言葉を再度口にした。

「あんたは、一体、何者なんだ」

今一度問わなければいけない、今の蒼崎はそんな脅迫めいた雰囲気纏っている。

一歩足を下げて、回れ左。

取り払った眼鏡を、左手にだらしなく下げた蒼崎橙子という女は、おれの言葉に応えて口を開く。

「本職はしがらない人形師だが……それと別に魔術師なんてものもやっている」

タバコを啜えた蒼崎の口元が不敵な笑みを作る。

どんなな嘘でも、信じなければそこから墜落してしまいそうな気

分にさせる、底の深い表情に、あやうくおれは飲み込んでしまうところだったが、かろうじて踏みとどまる。

実体の分からない自称魔術師の正体よりも、初めてみた蒼崎の眼鏡を外した顔について、どうしても言わずにはいられなかったことが、おれを辛うじて繋ぎとめていた。

おれは言った。

「あんた、目つき……悪いな」

1999年3月。

おれは赤橙<sup>せきとう</sup>の魔術師に出会った。

人生の方位磁針を大幅に狂わせ、普通と呼べる範囲の平穩を相当量奪い去ったという意味においては、運命的な出会いに違いなかったのだろう。

幸か不幸か、必然が偶然か、そんなことに興味は無い。

確実に言えることは、あの女が存在をおれの生涯から消し去ることが出来ないということだけだ。

<序章 1999年3月 了>

## 序章（後書き）

序章です。次回1章の公開は2011/12/29までに行います。

## 第一章

### 第一章 幻想迷妄メテムサイコシス

八月になったばかりの夜、事前に連絡もなく式さんがやってきた。「よ。相変わらず面倒くさそうな顔だな、桃園寺」

唐突に、問答無用で現れたこの女は、手提げのバックをぶら下げたまま、靴を脱ぎ、框を踏んで入ってくる。そして、勝手知ったるといった様子で、冷蔵庫を開けた。

「余りもの」

バッグから次々と、タッパーに詰められた煮物や和え物が出てきて、それを要領よく冷蔵庫に詰めていく。

「オレと幹也は明日からしばらくいないからさ、聞いてるだろ？」

「旅行行くんですね」

その間、おれが両義の興信所で案件を受ける事も、聞いている。気の重い話だ。

「だから、その間に処理しといてくれ」

「それは構いませんけどね」

タッパーを詰め終えた式さんは、立ち上がってコチラを見る。

「なんだよ」

「一応、この部屋に今は若い男一人、ってことをそろそろ認識してもいいと思うんです」

「別に、オレがここに来るのは始めてじゃないだろ。これまでも、いつだって部屋にはお前一人だったじゃないか」

エコバックをくるっと回して畳むと、式さんはそれを着物の袖に仕舞う。その隙を見て、骨のように白く細い手首を、おれは強引に掴んだ。

そして引き寄せる。

水面のようにゆらゆらと揺れる目。凜々しく光を放つ反面で、ともすればあっさりと砕けてしまいそうな、この世の中で両義式という人間しか持つていない、魔を孕んだ視線。

じつとおれを見つめ返す、その瞳が収まった顔は白く、その周りにミディアムの黒髪が彩りを添えている。

化粧気はなく、ほとんど白と黒だけで頭部の色は構成されているが、それで十分完成品といえる出来だった。

「綺麗ですね、式さんは」

「子持ちの人妻に何を言ってるんだか」

あくまでも式さんは平静だ。

「世の中には、人妻をありたががる風習があるんですよ」

「日本だけだろ、それ」

「髪、いつ頃からでしたっけ、自分で切らなくなったの」

おれが握っていない方の手で、式さんが襟足の髪を払う。かつては、不揃いで固かった髪が、ふわりと風で、彼女の匂いをおれの方に運んだ。

「結婚してからだな」

それ以前は、着物と、鋭い目と、不揃いな髪が式さんのトレードマークだったのだが、今はお付のスタイリストによって、毛先が綺麗に整えられている。

「いろいろ、心境の変化もあったようで」

おれは空いている手で式さんの肩に触れる。

以前は着物の裾に触れたりするだけで、刺すと言わんばかりに睨まれたものだが、最近の式さんは柔らかくなったというか、頓着しなくなった。多分これも結婚してからだろう。

「変らない事の方が少ないだろ」

そう口にした式さんの態度は確信に満ち溢れていて、美しい。

なで肩を上って、おれは着物の襟に手を掛ける。体をさらに寄せた。

「想像してみろ」

息が掛かるほど近さにも、式さん動揺とかそういう素振りを見せることなく、あくまでも淡々と告げる。

「もし、オレがここでお前に『構わない』と答えて『その先』にいったとするだろ」

「行っただとしましょう」

「それが幹也に発覚したとする」

「拙い状況ですね」

一般的には修羅場だ。

「そしたら、幹也はどういう行動取るか。あいつの性格的にキレたり暴力なんて、単純な方法は取らないし、それでケリもつかないだろう。数少ない部下であるお前に対して、温情も掛けて容赦もしてお前やオレの落ち度よりも、むしろ救済の余地を闇雲に探すさ。そして勝手に納得して許してしまう。黒洞幹也はそういう奴だから仕方ない。問題はここからだ。あいつは、あれで結構嫉妬深いというか思いつめるんだ。そのくせ感情の整理は物凄く下手。そこが面倒くさい。そしてお前は、その面倒くさい上司の下に、それから毎日通う事に」

「よくわかりました。っていうか、最近になって式さん燈子みたいな言い回しが増えましたね」

「懐かしいだろ？」

「別にそうは思いませんけど……」  
手を離す。

この両義式という女性が、伴侶として選んだ相手は黒洞幹也という。苗字が違うのは正式な結婚ではなく、いわゆる事実婚だからだ。幹也さんは現在、両義のお家専属の興信所で所長。おれもその職員として、一昨年から働いている。きっかけは、幹也さんの誘いだ。あの人は、どうしようもないお人好しで、会って一年もたっていないおれを、人手は必要だから、とか、最初の職員は信用できる人がいいとか、何かと理由をつけて雇いたがった。



身寄りのないおれに、馬鹿馬鹿しいぐらい本気で同情して、給料という名目で合法的かつ道理的に金と生活を与えようと必死だったのだ。

白々しいぐらいの一般論を展開するところは、好きになれない。正直、面倒くさい。けど、嫌いかというと、そうではないと言い切れる。悪い人じゃないとか、感謝はしている、とか半端な気持ちではなく、明確な好意として表現できるだろう。

ただ、それを気の迷いから裏切ってしまうぐらい、式さんが魅力的、というだけの話。

もちろん冗談のつもりだ。幹也さんを裏切るのも、怒りらしい怒りを見せないあの人から追求を受けるのも嫌だし。

おれが手を離れた後、乱れた着物の襟を正す。しっとりとした仕草だったが、艶っぽいとかはない。顔立ちと合わせて体つきも中性的で、女としては正直見るところの少ない姿だ。

この人の何がそんなに好きなのか。

多分目かな、と思う。おれたちには視えないものを映す目は、その中に静かな世界を存在させている。おれたちとは違う完全な世界を見ているのかもしれない。

「こつちに来るときに、地下鉄を使っただけだよ」

元々、式さんが住んでいたときよりは、部屋の中の物は増えているが、その中でも変わらず、同じ位置にあるベッドに、式さんは腰を下ろした。無遠慮、無防備、無警戒。そういうところも、好きかもしれない。

「痴漢に遭いませんでした？」

おれも床に腰を下ろす。

「休日の夜だぞ。スカスカだったよ」

つまらないお返事が頂いた後、式さんは唐突にこんなことを言い出した。

「人魚を見たんだ」

「にんぎょ？」

「そ。人間の体に、魚の足がついたやつ」

童話なんかに出てくる、オーソドックスな姿をイメージする。

「地下鉄にですか？」

「うん。トンネルの中をさ泳いでた」

見るではなく、視るってやつだろう。おれには理解出来ないが、式さんには判る。そういう普通にはない感覚がある。

「夢みたいな話ですね」

「夢か。そうだな、まるで……」

そこから先を続けることなく、式さんは窓の方に視線を向けた。

『オレは夢のようだった』

そんなことを前に、式さんが漏らしたことがある。人とは違うものを視ている人にとって、おれたちが見ている当たり前の世界は、視覚の外、目を閉じたときにだけ存在している、夢のようなものなのかもしれない。

「式さん？」

黙ってしまった式さんが、呼びかけに反応してこちらを向く。

「ああ、悪い。年を取ると、ぼうつとする事が多いな」

「年って……まだ二十一でしょ」

「そういう事じゃない」

式さんは屈んで乱れていた着物の裾を正す。

「数字はあまり意味がない。自分がどう在ってきたのかは、自分しか計れないものもあるのさ」

そしてよく分からないことを言う。

式さんはたまに冗談は言うが、基本的に本質の事を話す。というか本質のことしか話さない。理解するための、重要な課程なんか省略して言うので、どうしても分かりにくい。問題集の答えだけ見せられて、問題を想像してください、と言われていたようなものだ。逆に橙子は、余計な過程ばかり話してなかなか答えを出さない。言葉の数も圧倒的に多い。橙子と式さんでは、話のスタイルは正反対であるものの、要約しないってことと、返答に困るって事だけは共

通していた。

こういうときは、好きに話してもらうのを待つに限る。

「あの人魚だって、多分そうなんだ。キレイに無垢でありたいと思いなから、どうしても肯定できない事があって、人間をやめなないといけなくなった。少し、鮮花に似ていたな」

鮮花というのは、幹也さんの妹で、式さんにとっては事実上の義妹になる。

元々は、橙子の弟子だったが（よりもよってあんなやつかいなババアの弟子になったんだと正直思う）、師が突然事務所を畳んで姿を消したので、後に出来た両義の興信所に流れて、たまに手伝いとかが冷やかにやってくる。

見た目は抜群にいいけど、負けん気が強くて、何かと面倒くさい子だ。Ｔ大落ちた、と言うと烈火の如く怒り狂う予備校生。

まあ確かに、プライドが高い子だし、何かと受け入れ難い事実があったことか、綺麗なところは、式さんの言う人魚の話に合致はするけど。

おれが考えていたのはまったく別の事だ。

「鮮花……鮮花かあ……」

幹也さんと式さんの旅行中、おれ一人で事務所にいるって事は、その間鮮花の相手を一人でしなければいけないってことだ。

鮮花は式さんに因縁があるらしく、兄である幹也さんと仲良くすることを、かなり嫌がっている。

それが旅行に行ったとなったら、まあ、おとなしくはしていまい。暴れるかもしれない。

「何だ、お前たちまだ何か上手くいってないのか？」

その上、鮮花はおれに対しても何か、言いようの無い怒り覚えているらしい。

「上手くいくも何も……顔を合わせる度に微妙に不機嫌なんですよね。何に怒ってるのかもよくわかんなくて」

その原因というのが、どうやら俺にあるらしいのだが、身に覚え

が無い。

「どうせお前のことだから、つまないことと言って怒らせただろ」

「いや、そういうのなら次会うときには、けろっとしてるんで」

「ってことは、やったのか」

「まあ、会う度に何かしら怒らせてますね」

式さんが流石に呆れた顔をする。

「断言するなよ……」

おれだって、本当に毎回怒らせているかなんて覚えていない。でも、からかうと可愛い。やらない理由がないから、間違いくやっていると確信出来るだけだ。

「まあ、お前の軽口ぐらいで鮮花が本気で腹を立てるなんて、オレも思ってたないけどさ」

「ですよ。なんかいつも、それ以外のことでむっとしている感じではあるんですけど」

「心当たりはないのか？」

おれは首を横に振るしかない。

「全然。ただ、もしかすると、おれが直接何かしたってわけじゃないのかも」

間接的に迷惑をかけたって場合だけど、それだとおれにはどうしようもない。

「ありえない話じゃないな。案外お前たち、どこかで会ってたりしてさ」

その可能性も、考えなかったわけじゃない。

けど礼園のお嬢様が、高校中退のフリーターだったおれと接触するって、まずないことのように思う。

けど人生何が起こっているかわからない。

おれの脳髓でまだ現実と結びつくことなく、眠ったままになっている記憶の中には、もしかすると鮮花のものがあるのかもしれない。

「ま、頑張れ」

おれが少し真面目に考えようとしたところで、唐突に式さんは突

き放すような言い方に変えた。

「急に人事になりましたね」

「まあ、実際オレには関係ないし。お前たちが何とかすることだ。桃園寺、お前は鮮花が嫌いか？」

「鮮花のことは普通に好きですよ」

式さんを感じるような、異性間を超えて惹きつけられる魅力とは違って、純粹に女の子として好きということだ。

「ならいいじゃないか」

何がいいのかわからない。ただ式さんは意味深ににやにやしているだけだ。何を聞いても多分まともな答えはないだろう。

「とにかく明日からしばらく、よろしく頼むよ」

堂々と面倒を押し付ける言い草に、清々しさを感じる。

「はいはい」

それで会話は終わった。

式さんはしばらくおれの部屋　かつて自分が住んでいた部屋を懐かしむように、二時間ほどぼけっとしてから帰っていった。

変わらない事の方が少ないと言った当人だが、猫みたいに気分屋なところはまったく変わらない。

彼女をアパートの下まで送り届けてから、おれは二年前まではなかったテレビの電源を点ける。

『　正午ごろ、地下鉄Ｔ線Ｓ駅内のホームで、５人の女性が相次いで飛び降りました。調べでは……』

ニュースキャスターの無機的な語りを眺める。

「人魚か……」

あれって、人を誘い込んだりもするんだっけか？

両義の興信所、すなわち幹也さんとおれの職場は、案外地味なところにある。

近所に大手の家電機器の会社があるオフィス街から、徒歩20分ほど離れた場所にある東科ビルという細長い建物、その二階。

5階建てなのだが、他の階の看板は空欄のまま。

バブル期の失敗建築を絵に描いたような立地の悪さと天井の低さから始まり、通気性悪く、夏暑くて冬も汗ばむ、エアコンのために作られたような部屋が売りだ。

しかも狭い。一階はポストとエレベーターのためにあるような場所である事から、上階の程度も知れるだろう。

見るからに役にたたなそうな場所だが、組関係の興信所のあるベキ場所としては、あっているのではないかと思う。

部屋の中はシンプルで、所長が使う大きなデスクと、その3分の2ぐらいサイズのおれデスク。客は両義の関係者が身内だけなのだから、応接セットも小ぶりなテーブルに二人がけのソファが二組向き合っているだけ。後は資料や本のある棚。

それでも、一人には少し広いぐらいの場所ではある。

おれは自分のデスクに足を乗せて天井を仰いだ。

今朝、来たときに投函がないかと、ポストをチェックした。しなきやよかったと思った。

怪しげな封筒が入っていて、見てみると蒼崎橙子の名前。

一年ほど前に唐突に行方を暗ましたクソババアの便りが、ろくなものであるわけがない。

そもそも橙子がろくでなしだったわけで。

破り捨ててなかったことにしてやりたいが、そういうわけにも行かず、しかし見る気もないまま途方にくれていた。

面倒なことってというのは重なるもの。

扉に取り付けられた、旧型のテンキーがピッピと警戒な音を立ててロックを解除する。

セキュリティとしてはザル極まりないが、中に人がいる状態であれば、その電子音を聞いて、入ってくる人間をある程度特定出来るのは、多少便利かもしれない。

「こんにちわー」

愛想を省き、無駄のない棒読みで入ってきたのは黒桐鮮花。幹也さんの（際立って外見が）よく出来た妹さんだ。

「おーっす」

「あれ？ 貴方だけなの、兄さんは？」

鮮花の言う、貴方、つてのが少し他人行儀で刺々しい。それが鮮花に感じる、妙な不機嫌さの片鱗だ。素が出るとすぐに「あんた」とかになるから、確実に何か意図があるんだろうけど、聞きづらい。結果淡々と世間話を続けることになる。

「今日から一週間ぐらいいいねーよ」

「え……なんで？」

「なんでって、旅行だよ」

「どこに？」

鮮花の声に不機嫌な音色が混じり始めた。

「それは聞いてねーな」

「誰と！？」

「式さんとかな」

「なんで！？」

「新婚の夫婦が旅行するのは、普通の事だろ」

「聞いてないわよ！」

「やっぱりね、という話。」

予想通り、式さんは鮮花に      多分幹也さんにも      内緒で、出かけていったのだらう。

幹也さんの性格上、鮮花に対して故意に内緒にしたりはしないだらうし。まあ、あの人はあれで、大学やめて実家を飛び出した前歴があるから、もしかするとやるかもしれないが。

知っていたら鮮花がほうっておくわけない。何故放っておかないのか、その理由は、兄弟愛で片付けるにはやや生々しいので割愛するが。

鮮花が騒がないように、式さんも準備していたのだらう。本当に

水入らずでいきたかったということだ。

昨日のは差し入れというか、饞別だったに違いない。美味かったが。これから、一週間は彼女の愚痴を聞いて過ごすのか。

勤勉さにはあまり定評がないというか、面倒なことは避けて、手短かに生きてきたいおれとしちゃ、気の重い話だ。

見た目は可愛いんだけどさ。

「何であんたは平然としてるのよ！」

お嬢様学校出身のくせにすぐ素になつてあんたとか言うし、持ってた鞆はソファに投げつけるし、大股かつ早歩きでこっち来るし、襟掴んでくるし。

何で神様はこの子を、置物として作らなかつたんだろうかと、時々思うことがある。

「平然も何も、聞いてたからな」

「どうして、あんたは知ってるのよ」

それが不公平だと言わんばかりに詰め寄ってくる。

「おれはつていうか、むしろ鮮花だけが知らなかつたんだろ」

一瞬間を真つ赤にしたが、納得するものがあつたのが、冷静さを取り戻そうかとするように、頭を抑える。

「……式の仕業ね」

「おれも梓記しきだけど」

「くだらない茶々入れないで」

それもそうだなって事で、黙って紙に視線を戻したが、そこには鮮花よりも面倒くさい、蒼崎の文字があるだけだった。

「あーもう、油断した。よりもよって、模試の期間中を狙うなんて」

予備校生はタイヘンダナー。

今口にしたらずぶつ飛ばされるので、心の中だけで煽る。

鮮花はぶつぶつと小声で何かをつぶやきながら、むしゃくしゃした様子でトイレに入っていた。

いつもよりは大人しいと思ったら、つまり今日は、そういう日か。



と品のない推測をしてみる。

十分ほとして、溜息をついた鮮花が出てきた。  
あまり見る場所もなく、景色も悪いビル内だ。彼女の興味はすぐ  
に、おれの手の中にある紙に向いた。

「なにそれ？」

許可もなく問答無用で紙を掴んで、ひったくる。

「一応、顧客の依頼書なんだけどな」

鮮花は正式な社員ではない。

「いいじゃない、別に」

守秘義務、企業や事業内容で守られるべき秘密とかは無視ですか。  
これだから予備校生は。暇なのか？

「なんか言った？」

「いやー」

危ない危ない。

「つてこれ、橙子さんのじゃない!？」

「ああ」

「行方が分かったの？」

「なんでそうなる。勝手に来た。偽者かもしれない」

「字はそっくり。間違いないわよ」

まだ封筒見ただけなのに、わかるものなのか。それなりに長く付  
き合った師と弟子だからこそ？

まあ、蒼崎なんてかつたるい名前を騙ってわざわざこんなチンケ  
な興信所に投函してくる物好きもいないだろうが。

「えっと、なになに……」

「もの読むときに、本当に『なになに……』って言う奴は初めて見  
た」

「あんたも言ってることあるわよ」

「うそ？」

「嘘。知るわけないじゃない」

「あっそ」

可愛くないが……可愛い。

おれの隣に立ったまま、デスクに置いた紙を前屈みになって眺める。

長い髪が邪魔らしく、片側を耳の上に乗せた。

その瞬間、ふわっと、ヤバイぐらいいい匂いがする。それに釣られて横顔を見たが、直視するのが辛くなってすぐに逸らす。美人過ぎた。生きてるのが辛い。

女子高に閉じ込めておくのが、正解だったような気もする。いろんな意味で。

「でも、これって……」

露骨に興味を示す。

「一応、おれが受けた話だからな」

「橙子さんはわたしの師よ。無関係じゃない」

あるいは、鮮花が知ることを前提に送りつけてきたのかもしれない。

橙子が送ってきた封筒の中には、件の地下鉄の飛び降りの記事の切り抜きと、

『よろしく』

というメモ。

多分橙子側の都合を、こっちに押し付けてきたってことなのだろう。

姿は見せないくせに、勝手だなあ。らしいけど。

しかし、せっかく鮮花が興味を示した事だし。このまま放っておいて、旅行中の二人のことでごねられるのは御免こうむる。

留守番まかされたけど、依頼もないし、どーせ暇だというのも正直あった。

やっぱり面倒くせーけど。

そんなわけで、事件のあった地下鉄に向かっている。

ビルの乱立する路地裏で、日差しが直接当たることは少ない道を選んだが、地面から吹き上がって来る熱気のせいで、余計地獄だった。

おれは着古しのジーンズに、貰いもののＴシャツ一枚にサンダル。鮮花は白のブラウスに、今日は黒のショートパンツ、同色のストッキングとブーツという姿で、少しゴシックなデザインになっている。焼けたくないのか、30度を越す中で長袖。暑苦しいこの上ないが、それよりも服のセンスが橙子に似てきた事の方が気になる。

「こうやって二人で歩いてると、恋人とかに見えるのかな」

「人によるんじゃないかしら」

釣れない返事だ。おれの顔を見ようともしない。

なんか歩くペースが上がった気もする。

「とか言って、本当はおれのこと好きなんだろ？」

ちよつとムキになって言った。

鮮花が宝石みたいな、透き通った目でおれの方を見た。感情の読み取れないニュートラルな表情で、じつとおれから目をそらさない。もしかして本当に好きなの？ という期待感が徐々に高まって、

「ふっ」

……鼻で笑いやがった。

なんか知らないけど、すごいショックだった。

答えの如何に関わらず、「おれはお前のこと好きだぜ」と言ってるつもりだったのに、地下鉄に入るまで口も聞けなかった。

お互い無言で地下に降り、入場券を変わりに一番近い駅への切符を買って、ホームの中に入る。

鮮花が両手で体をさする。

「寒い」

「夏だからな」

我ながらおかしい事を言っている気がする。でも夏じゃないと冷房は使わないだろう。

ホームの中は冷房が効いていたが、おれとしてはちょうどいいくらいだった。やっぱりそこらへんは男と女で、体感温度に差があるのか。

周囲を見渡す。平日の真昼間って事もあり、人はまばらだ。

端から片側まで向かってホームを歩く。

「昨日人が死んだ現場つつても、淡泊なもんなんだな」

ホームや線路に、その痕跡はまったく見当たらない。一昨日よりずっと前から繰り返されてきたであろう、地下鉄の風景があった。

「そうね」

てつきり「当たり前でしょ」とか、そんな小馬鹿にしたお返事が頂けると思っていたが、意外にも鮮花は同意を示した。

「とりあえず、見ていても何も得られないって事はよく分かったわ」

「ってことは聞き込みか？　　つても手掛かりなんてほとんどないしな」。死んだ人の名前と見ていた駅員ぐらいか？　単純な目撃者つてんなら、それこそ大量にいると思うけど」

生憎、事務所にいてもおれは雑用係で、調査は素人だ。幹也さんも別に訓練を受けてるとかそういうわけじゃないし、そういう意味では素人なだけだ。あの人は行動力がすごい。あと、友達は少ないくせに、初対面の人に信用されやすいから、歩いた分で得られる情報量が多い。あとおれと違うのは、集中力だな。

「うーん」

鮮花顎に手を当てた。

「ま、依頼人が橙子だしな。そんな真面目にやる必要もねーと思うけど」

両義の家からの依頼なら、死ぬ気で聞き込みするけど。

「橙子さんの依頼なら、そういう現実的な手段は回り道になる可能性が高いと思う」

「ああ」

そついう考え方もありか。確かに胡散臭くていろいろ残念なババアだが、魔術師っていうのは本当だ。

「なるほどね。じゃあ、直弟子になる鮮花なら、何か出来るのか？」  
睨むような視線を向ける。

「生憎、わたしが出来るのはせいぜい火を上げる事ぐらい。後付の魔術じゃ相応の知覚　呪術的な情報を自分に入力するための器官や感覚が育たないんだって。あんたこそ何か無いわけ？　一応橙子さんに見込まれているわけだし？」

もしかしくなくても八つ当たりだ。自分に出来ない事を指摘されるのが、鮮花はとことん嫌いだからな。

「おれも専門は出す方で、入れるのはな。出すのは得意なんだよ、ホントニイツ！」

ぶん殴られた。

「おんつまえ！　グーだったぞ！　しかも痛え！」

「下品な事言うからでしょ、バカッ！」

「だからって耳まで真っ赤になるか？　中学生かよ」

今度はローキックだった。

「だから痛いって！」

ブーツの硬いつま先で、的確にスネを狙ってくる。

「あーもう！　こんなとき式が……」

頭を抑えてつぶやいてから、鮮花は唇噛んで舌打ちをした。

そうか。確かに式さんなら、普通の人にはない特別な感覚のある

あの人なら、この手の捜査には最適ってわけだ。

「そんなに式さんが嫌いだよ」

「嫌いじゃないわ」

即答だった。

「憎いだけよ」

ナルホド。単純な乙女心ってわけじゃないんだろう。

「あ、そういえば、昨日式さんが言ってたな」

「あんた、昨日式と会ってたの？」

そっちに食いつくのか。

「ああ、まあ。夕方の中途半端な時間にいきなり来た」

「それで？」

明らかに何かを期待する眼差しでおれを見上げてくる。

「……鮮花が期待してるようなことはねーよ。旅行行くから、あまり物食ベといってくれて、そんだけ」

すると露骨に落胆したように肩を落とした。

「そうよね。あんたにそんな甲斐性があるわけないか」

多分それは甲斐性とは言わない。ついでに言えば、『出す入れる』で顔を真っ赤にするような女に言われたくない。

「っーかい加減諦めたらどうだよ。式さんと幹也さん、あれって恋愛感情だけの繋がりじゃねーぜ？ もっと深い……なんっーか」

「共存関係？」

「それだ。って、わかってんじゃん。特別なんだよ」

「特別なのはわたしだって同じ あっ……」

とっさに口を押さえた、鮮花の顔には苦々しい表情が浮いている。

つい本音を漏らした事を悔いているようだ。幹也さん以外は多分全員察していることだし、今更遅いと思う。ただ、自ら口にするっていうのは意味合いが違っただろう。これも一種の魔術か。

「まあ、いいわ。それで式なんだって？」

何故か偉そうだ。

「いや、事件現場で人魚を見たって」

「にんぎょ？」

首をかしげた鮮花は、すぐにその言葉の意味を考え始める。

「人魚か……それって、上半身が人の方よねきつと」

聞いたことをそのままの意味で捉えて、すぐに考えられるっていうのも、中々順応してきてるなと思う。普通は人魚なんざいないと考える。

「キレイって言ってたから、そうなんだろうな」

普通の人間の美的感覚を当てはめるなら、だけど。

鮮花は線路を眺めて黙りこくってしまった。

一気に暇になる。

「あれ、お前ら」

と思つたら、見知つた男がホームの階段を下りて、こちらに向かつてきていた。

「なんだよ、平日の昼間からデートか？」

「違います」

鮮花が鋭く振り向いた。

まあ違うけどさ。いちいち傷つくおれもどうかと思つけどさ。

「何の用っすか」

「ご挨拶だな」

肩をすくめる男は、会いたいか会いたくないかで言えば確実に後者。今のところ目立つた実害はないが、めんどくさい、そういう男だ。

秋巳大輔。一応、この国の治安維持に貢献しているらしい。

「偶然会つた大人の知り合いに対してその態度はないだろ。人生の先輩だぞ」

「ああ、人生の後輩をダシにして、女に言い寄ろうとした人生の先輩ね」

別に誰が明言したわけでもないが、幹也さんの話を聞く感じだと、橙子に言い寄ろうと必死だったことは伺える。

秋巳の額に一瞬青筋が浮いたような気がした。

そして、先にはつきりさせておくと、おれはこの秋巳という男が好きではない。嫌いというほどでもないが。理由は、いろいろ。とりあえず、警察関係者というのはいい気分がしない、っていうのがひとつ。

「ま、いいや。デート以外でお前と鮮花が一緒ってことは、やっぱり例の飛び降りを追つてたりするんだろ」

「何でそう思うんだよ」

ほとんど条件反射。こいつの言う事を素直に肯定するのは癪だ。なんか知らないが、この飄々とした態度が腹立たしい。

「普段都営の地下鉄使わないお前等二人が、揃って駅のホームに居

たら、違うつて言う方が難しいだろ」

「あっそ」

つまらない解答だった、言い返せない正当性を持っていたので、話の矛先を変える。

「そっちこそどうなんだよ」

「俺も捜査だよ」

「なら、おれらに構ってないで仕事しろよ」

「今日は非番だ調査は俺の趣味」

「休みの日ぐらい寝てりゃいいのに」

「そうしたいのは山々だけどな」

いつもどこか飄々とした響きを、言葉の端々に残す秋巳が、珍しく重い息を吐く。

切実に家にいられない理由があるってことだ。

弱点を突くチャンスだと思い、なんだろうと、普段使っていない想像力を巡らせた。

「あ、もしかしてコジカちゃん？」

舌打ちでもせんばかりに、眼を背ける。完全に凶星らしい。

コジカというのは、最近になって着任した殺人課の女刑事。本名はこがけいこ小鹿佳子。秋巳に露骨に惚れており、休日もいろいろと世話を焼いてくるらしい。基本的には素直でいい子なのだが。

「あいつとは関係ない」

だからこそ、邪険にも出来ない。多分、どんな男にとってもやりにくい相手だろう。

「ただ、こういう『不自然な事件』を追ってりゃ、いつかは……」

またしても言葉を切る。今日は何か嫌な事でもあったのだろうか。いつか、橙子に会えるか？ 今日にはボロが多いな。っていうか、

あんなクソババアのどこがいいかね」

「ババアじゃねえよ。それにいいところもあるっ」

「外面と見た目の良さだろ。本性知ったらすぐに忘れる」

「俺はその本性を知らねえんだよ」



静かな声だったが、つかみ掛からんばかりの迫力があつた。

「とにかく、会えばなんとかなるだろ」

「なんとかって」

「お前、本当は何か知ってるんだろ？」

「は？」

「とぼけるなよ、周りにお前が現れてから、蒼崎はいなくなつた。幹也も知らないっていうし。本当に、忽然といなくなつたんだ。…」

「ああ、そうやってさあ、乗り遅れて行っちゃうんだよなあ。なんか、見えない列車が来るのを待つてみたいだ」

これは、重症かもしれない。

見ていられなくなつたので、おれは秋巳から眼をそらした。

「あれ？」

いつの間にか鮮花がいない。

男同士の会話に興味がなんかあるわけもなく、呆れてどこかに行つてしまつたというのは十分考えられる。

そう遠くには行っていないだろうから、まずはホームの中を探す。鮮花にとつておれがどのぐらいのランクに位置づけられているのかは分からないが、無用の心配をさせるほど礼儀知らずでも無ければ、まして迷子になる心配をしなければならぬほど子供でもない。その辺りは安心していたのだが、それはすぐに裏切られる形となる。

向かい側のホームから奇異な視線を感じた。

それが集中している箇所に向けると、ホームと線路との間に腰を下ろして、足をぶらつかせている黒髪ロングの女の姿があつた。

鮮花だ。周囲を気にした様子も無く、なにやらぼうつとしている。駅員が気づいて走ってきた。

無用に絡まれるのは面倒なのは、おれはそれ以上の速さで限りなく全速力で鮮花に近づき、二の腕を強引に掴んで、羽交い絞めちかい格好で線路側から引きずり上げた。

「何やってんだよ、危ないだろ」

結構久しぶりに怒鳴ったかもしれない。

しかし鮮花は鈍く、緩慢な動作でおれに向かって振り向いた。

「うん……えと」

「お前大丈夫かよ」

聞くがすぐに返事はない。あつたのかもしれないが、聞き取れなかった。

ホーム電車が近づいてきてそのアナウンスが響きわたる。

それとほとんど同時に、構内で誰かが大きな声で泣き出していた。見渡すと、二十代前半ぐらいの若い女の人が顔を覆っているのが見えた。

ホームに電車が接近してくる。

その瞬間、女の人が駆け出した。

ホームに向かって。

事故で落ちたならともかく、自らの意思によってそこへ向かっていく人を、この日常の中で誰が止められただろうか。

そして女は身を翻して落ちていった。

鉄の激流が流れる運河に向かって。

呪われた軌跡を描き、泳ぐように空を掻くと、

血の泡となって、この世界から消えた。

えらくゆっくりに感じられたけど、一瞬の出来事だった。と、思う。

助けられたかもしれない。けど体は動かなかった。

「あの……」

鮮花の声で我に返った。

彼女はぼんやりとした、表情で俺を見上げてくる。

「貴方は誰？」

信じられない言葉を聞いた気がした。信じられないと言えば、引き起こした後からかなり長い時間、胸を触っていたのだが、それに

ついて何の反応も無いのも変だ。

「あ、桃園寺くんだよ。うん、わかる。わかるけど、そうじゃないくて……とりあえずここは……」

単純に混乱しているというとは気配が違う。桃園寺くん？

「……とにかく、一旦帰るぞ」

秋巳といい、鮮花といい、何かがおかしい。嫌な予感しかない。飛び降りの現場にぞろぞろと人が集まってきた。

面倒なことになる前にひとまず地上に上がろう。

うざったいぐらい高い気温の下に晒せば、調子が戻るのではないかと期待し、おれは手を離して歩き出した。

「待つて」

「え？」

「置いていかないで」

振り返ると、ひざ崩れになってへたり込んでいる鮮花の姿があった。

いつも勝気な態度は微塵も無く、弱々しく、すがりつくような視線で助けを求めている。

おれは自分の見ているものが信じられなかった。

「寒い……」

鮮花が呟く。

「わたしは……」

地下鉄から出たおれは、鮮花をおぶって真夏の道を歩いた。

人一人をしょってるとは思えないほど軽い体であることと、シャツ越しに伝わる体温が、ひんやりと冷たいことが、ろくでもない事を連想させる。

歩けないと言っていた鮮花はいつの間にか、目を閉じて意識を失っていた。

呼吸音だけは微かに聞こえる。けど、まるで時間が止まったように静かだった。

最初は事務所に連れて行こうかと思ったが、人が横になるようなスペースがない事を思い出し、他に当てもなかったから、しかたなくおれの部屋に連れて行くことにした。

それからが大変だった。

事務所に置きっぱなしだった、鮮花の携帯電話を持ってきて、友達が少ないくせにやたら多いメモリーの中から、まずはおれも知っている人物を探す。

助けてもらうためだ。

藤乃ちゃん、はダメか。間違いなく鮮花と仲はいいんだけど、目が不自由だし、何より今の鮮花の有様を本当に親しい人に見せると、後が怖い気がする。

とすると、次は静音ちゃんなのだが、都合を尋ねてみたところ。

『ごめんなさい今締め切り前なんです』

という修羅場めいた返答が来た。よくわからないが、まあ、多くは言うまい。夏だからな。

それに、未来が視えるというわりにそそっかしい静音ちゃんを呼んだところで、状況がこじれこそすれ、良くなることはないとも思う。

それでも誰かに助けてほしかった。

おれのベッドの上で上体を起こしたまま、微動だにしない鮮花に視線を移す。

彼女の目は虚ろでどこを見ているのかわからない。瞬きもせずじっと一点を見ている。

いや……見ている、という表現は正しくない。

向いている方向にたまたま目があるというだけで、実際に物を目で捉えている素振りはない。目の前で手を振っても、完全に無反応。しかし何より恐ろしいのは、部屋に連れ帰ってからというもの、鮮花の呼吸が完全に止まっている事だった。

脈も、あるのかもしれないが、ほとんど感じられない。

しかし死んでいるという感じもしない。

肌は冷たいが生気が感じられたし、上体を起こしたままの姿勢で、筋肉が変質しているような感じもない。

まるで一番美しい瞬間に時間を止めてしまったような、そんな死ぬよりも美しい彫刻をみているようだ。

その人形めいた精巧な美貌は、危うく心を奪われるような、魔性を秘めている。式さんに感じるそれと近い。

このまま、どこかに仕舞っておきたいぐらいのものであるが、このままほっておくわけにもいかない。

式さんから留守を頼まれているのもあるし、何よりおれも健康的に動いている鮮花の方が好きだ。

けど、事情が事情だけに安易に医者に行くことも出来ないし……。鮮花の携帯電話を持ったまま、おれは途方に暮れていた。

自分の携帯は役に立たなさを呪う。

時刻は夜の10時を回ったところ。明日もこんな調子で過ぎていくのかと思うと、自然と溜息が出た。

……と、そこへ。

唐突に、床に置きっぱなしにしていた、携帯がピピピと着信音を鳴らした。

脱稿した静音ちゃんが、冷静になって掛けなおしてきてくれたのかと思ったがそうではなかった。

見てみると非通知設定の電話だ。架空請求が流行っているご時勢だが、10コール以上過ぎても、鳴り止まないのも仕方なく通話ボタンを押し、スピーカーを耳にだけ当てた。

声は発しない。

『私だ』

「え？」

思わず声が漏れた。

天への助けというのは分からない。ただ今この状況で、不本意ではあるが、もっとも心強い人物の声だった。

「……橙子か？」

それに答えはなく、

『首尾のほうを聞こうと思ってな』

一方的に話し始めるということは、眼鏡はしていないらしい。

けど、そんなことはどうでもいい。

橙子ならこの状況から脱する手がかかり、ないしは解決手段を知っているはず。

一刻も早くそれを聞き出したい焦りと、状況を理解していない橙子の暢気な口調への苛立ちで、声が荒くなる。

「どうもこうもねえよ。鮮花が」

おれが支離滅裂にまくし立てると、受話器の無効で大きく息を吐く音が聞こえた。

おそらく煙草だろう。

『詳しく教える。順を追って、なるべく克明にな』

眼鏡がないときの淡泊な声以上に、冷たさを感じさせる声で橙子は告げた。

地下鉄に向かう階段を、おれは一人で下りる。

週末を明日に控える深夜の構内は、不気味なほどしんと静まり返っていた。

乗客が人つ子一人いないどころか、改札にも駅員がない。灯りだけがついている。この場所が現実存在しているのかすら、信じられなくなるような荒涼とした風景だ。

いかにも何かが出る、人以外のものが出ると言わんばかりの場所だ。今から化け物退治を試みる舞台としては、おあつらえ向きか。

人がいないことをいい事に、改札を跨いで超える。

ホームへの階段を下りる。終電は終わっているため、もちろん誰もいない。駅員ぐらいはいるかもしれないと思ったが、この空間が

死んでいるかのように動くものが存在しない。

けど、確実にここにはいるのだ。おれには直接感じ取る事は出来ないにかが。

借り物の眼鏡なのにぴったりなフレームが忌々しくなり、ブリッジを押し上げた。

持ち上がったレンズの上の端が、一瞬異質な光景を映しだす。

慌てて天井を見上げると、そこにはやんわりと脈動するように揺らめく海が広がっていた。その中にいる、浮遊するように泳いでいるのは、件の人魚に他ならない。

おれは『障壁破り（めがね）』の位置を改めて、それに焦点を合わせる。

閉ざされたい壁が破れて、この世のものとは趣を異にする空間がおれとの接点を持つ。

非日常の世界。

もしかしたら、本来いるべきかもしれない世界。

「おれの世界によっこそ」

泳ぐ人魚と目があつた。

『あまり時間はない』

一通り説明した後の橙子の返事には何の意外性もなかった。

そんなことは見ればわかる。呼吸が止まってるんだから。

「だから、どうするんだよ」

『ふむ。おそらくその地下鉄の人魚とやらは、暗示によって禁忌を想起させるらしいな。いつぞやの幽霊と違うのは、地下鉄の駅という空間を自らの結界として活用し、言葉ではなくその空間の性質や印象で陥れているところか。原理は実際見てみないとよくわからないが……ローレライやセイレーン　まあこれらは厳密には人魚ではないが、水棲の魔女というのはほとんどそういうタイプになる』

言っていることはわかるが、ほとんど右から左だった。

鮮花が元通りになる方法以外には興味がない。

『彼女たちの結界というのは、本来捕食するためのものでね。人が作る結界というのは、細かい仕様はどうあれ結果的には誰かを遠ざけるために使用するが、彼女たちは真逆でむしろ積極的に誘い込むものになっている。特定の思考パターンを持つ人間に、先入観という種を植え付け、ある特定の条件が重なることで共鳴し、支配され感情を敵が口を開けて待つ場所に身を投げるというわけだ』

ホームに腰掛けているときの鮮花を思い出す。

「それはわかった。けどだとしたら変だろ。鮮花は全然動かない、結界に取り込まれているなら、むしろ積極的に地下鉄に向かわないとおかしいか」

『ああ。今の鮮花の状態は、人魚とは関係がない（……）。

鮮花自身が望んでそうなっているのだ』

「なんだって？」

『以前にも話したと思うが、魔術の戦いは尋問や交渉に喩えることが出来る』

聞いたかもしれないが、興味がなかったのであまり覚えていない。『自らは小を語り、相手から大を引き出す。魔術において勝利という状態は概ねこれが成功したことを指す。重要なのはいかに相手から、多くを引き出すか。尋問などにおいてはより多くを語った方が優勢になるから、表面的な言葉で語り口や語彙を変えて詳細を何度も話すのが、かなり効果的な攻めの手段と言える。だがこれは思いの他難易度が高い。触れられたくない核心を避けながら、かつ相手の核心に触っていくためには、語る分に膨大な知識と技術が必要になる。当然嘘も吐くことになるから、それによって生じる矛盾点から目を逸らさせることも必要になる。また、技量だけでなく恐喝という手段もときには必要だ。攻めに対して受けの手段だが、これは相手の語りに対してごく少量の言葉でいなしたり、挑発することで相手が墓穴を掘ることを誘うことをいう。攻めるよりは労力が少な



い分、相手の話の要点を瞬時に理解し欠点をつく、判断力と瞬発力が必要だ。また多くを語っていない人間というのは、感情的に後ろ向きになりがちになるから、相手の迫力に飲まれない頑なな信念も当然必要になる。……と、魔術の戦いはこれらの熾烈な駆け引きによつて、概ね勝敗が決するわけだが、唯一どんな攻撃にも守りにも耐え得る、最強と言える手段がある』

「なんだよ、それ」

『黙秘だ。よく刑事ドラマで聞くだろう。あれは一切を話さず、聞かず、応じず、と決めることによつて、秘密を守るのはもちろん、自らの心を守るのに有効な手段なのだが……』

「何か問題があるのか？」

『単に人との会話でそれをやるのは容易い。耳を塞ぎ、言葉を発しなければいいだけのだが、魔術となるとそうはいかない。魔術は相手のあらゆる入力器官、すなわち五感や六感、肉体に直接働きかけて、相手を籠絡するものだ。つまりどんなに頑張つても、必ず魔術の影響というのは少なからず受けてしまう。これを遮断するには、五感を全て閉ざさなければいけない。そんなことをしたら、普通は死んでしまう……というよりも、五感を黙するという行為が死と何ら変わらないというべきか。だから真つ当な魔術師は誰もこんなことをしない』

魔術師自体がもう真つ当じゃないだろうという、根本的な突っ込みは置いといて。

「そういう話をしたつてことは、つまりそういうことなのか？」

『ああ。今の鮮花が、そうなのだろう。おそらく結界に取り込まれることを拒否するために、限りなく死に近い状態を、自ら選んだ。わが弟子ながらまったく考えがない』

呆れた声で橙子が言う。

「それでどうすればいいんだよ」

『別にやることはかわらない。まず大前提として、人魚の存在によつて結界が発生しているのだからそれを絶つ必要がある。本来なら

式が適任だった……』

旅行に行っているとは、思わなかったようだ。

『今回は、お前が行け。前に渡したものがあろう』

キッチンの戸棚にある。ケースに入った眼鏡のことだ。

橙子が行方をくります前、唯一おれに残したものだ。

『視ろ。そして自覚しろ。桃園寺梓記、お前には奇跡にも等しい災いの力があることを忘れるな』

橙子の眼鏡ごしになら、見えなかったものがはっきりと見える。

本来見えないものを見る魔法の眼鏡かと錯覚しそうになるが、実際のところはそうじゃない。らしい。

橙子が前に言っていた。

『いわゆる靈感というのは、本来『ある』ものじゃない。人間が進化する上で、霊や妖精の干渉から受ける影響を無くすために、人が身に付けた本来持っているはずの抵抗力が『ない』から、視えてしまうものなんだ。式なんかは特にその抵抗力が弱い。意識的にガードしてなければ、器として優秀である故に、すぐに取り入られてしまう。しかし、過剰に弱い人間がいるなら、過剰に強い人間もいる。お前がそうだ桃園寺。もう一生、どんな訓練をしても塵ほども視えないほど、お前の魔に対する防御は完璧だ。貴重な『障壁破り』を使ってようやく視ることが出来る』

その『障壁破り』を使用したのが、今おれが掛けている眼鏡だ。心得のない人間は、掛けただけで発狂するような代物らしいが、おれにとってはただの飛び出す眼鏡に過ぎない。

レンズの向こうで泳ぐ人魚。

微笑をたたえながら、幽鬼のように宙に浮かび漂っている。しかし



あくまでもおれだけに判る感覚でそれはあるのだ。掴んだり握ったりするのは、少しコツのいる、見えない腕が。

丁寧に人魚の首をだけを掴んだ。どんなに距離があるうが、おれには関係ない。在ると判っていれば、何だって出来る。

早い話が超能力だ。<sup>サイキック</sup>そこに『在る』とわかってさえいれば、自由自在の事象を対象に齎すことが出来る。動かしたり、潰したり。

ある意味において、未来を出現させる能力だと、説明したのは橙子だった。でも言われたところで、はいそうですかと納得も出来ない自分の体の事なのに、出来ることがわからないっていうのも、面倒な話だ。

考えてもどうしようもない。結論としては、今出来るならそれをやる。力が必要だと思っただけ使うことにする。多分橙子もそれで納得しているんじゃないかと思う。

人魚の首を掴み、そのまま引きちぎる勢いで力を込める。打ち上げられた魚のように、のたくって悶える人魚を見て、一応呼吸は口でしているらしいと、心底どうでもいいことを考えてしまった。そこに油断があったか。

人魚の口から何から吹き出して、おれの身に降りかかった。慌てて掴んでいた『手』を離れた。というよりは、使うのにかなり集中力があるから、自然に外れたんだが。

何か害のあるものかと思ったが、そうではなかった。

「ゲロかよ、ばっちな」

庇った手についた奴を振り払う。あの美しい姿からは想像も出来ない下品な行為だ。でも、冷静に考えればアイドルだってウンコはするわけだし、おかしくはないが。

問題なのは、おれがうろたえている隙に、人魚が眼鏡レンズの範囲外に逃れてしまったこと。周囲を見渡すが、かなりの速度で動いているのか見つからない。

おれの能力の欠点だが、そこに在るとわかっていなければ何も出来ない。

地下鉄をもろとも吹き飛ばすっていうのもやれなくはないと思うが、流石に器物損壊ではすまないというか、ここに立っているおれもただではすまない。使う身が人間である、というのもこの力の大きな欠点か。

「どこだよ……」

ふと、妙な予感が背筋をなめた。

振り返る。案の定というか、そこにはゲロを撒き散らしながら大口を開いた、醜い女の上半身があった。

多分、ヤバイ状況なのだろうが。

おれの能力は、考えたり想像したりする割合の方が圧倒的に高いために、繊細な『攻め』はものすごく疲れるが、その逆の難易度は低い。敵が目の前で、やることがわかつているなら、簡単だ。たった一つ願えばいい。そうすれば頭突きより早い速度で、発現する。

吹き飛べ。

霊体の塊がまるで海中を漂うにプランクトンのように、鮮やかに浮遊し……泡のように消える。

タクシーで帰ろうと思ったら、財布を置いてきていた。まさに予想外だった。

仕方なく徒歩で戻って気が付けば夜が明けようとしていた。

部屋の鍵を開けて中に入ると、カーテンの隙間から漏れている光をバックした鮮花が、相変わらずの姿勢でそこにいた。

神秘的な光景だったが、ここまじや駄目なんだ。

変わらないものはなくて、止まっているのは、不自然だからだ。

おれは携帯の着信履歴から橙子の番号を押した。

『早かったな』

おれが成功したことは、電話した時点でわかることだ。

おれは『障壁破り』を再びキッチンの棚に戻しながら、携帯電話に向かつてどこにいてもかもしれない橙子に話しかける。

「人魚は何かしたけど。あれは結局なんだったんだ？」

『……輪廻』

「え？」

『人魚というのは不可思議だとは思わないか？ 水から上がり、性門を汚していく事で進む事を選んだ人の足を、何故ヒレと鱗に変える必要があったのか』

口調は問いかけるようだが、これは黙っていても勝手に話すパターンだ。橙子の話は時として独り言にようでもある。まあ、友達が少ないのと、独り身が長いせいだとおれは勝手に思っている。

『何故、海に戻ったのか。その必要があったとは思わない。人が一番大切なものは、なんだと思う？』

「命か？」

おれはシンプルに答えた。

『明確な答えは出ないだろうが、私は誇り……自尊心だと思っている。自尊心なんてものがなければ、自他を偽る必要もないし、金に執着するのも、手に余る権力を失った後、無難に生きる事が出来ないのも、地位に対する執着があるからだ。人の知性がそうさせるのか。海に戻るといふのは、一種の見栄なんだろう。誰の声も届かない深海で、人の目につかなければ、美しくあれる。そして、海とつかつてへ戻りたいという気持ち。思い出は誰にとっても美しい』

「人によるんじゃないかねえの、それは」

『過去の記憶としての憎悪を、持ち続けるということは、その人にとって紛れも無い現在であって思い出ではない。それが妄想に近いものであったとしてもな』

いわれてみれば、そうかもしれない。

『穢れなく無垢であることが、美であり純粹さだというのは、願望に他ならないだろう。』

そもそも美は瞬間的な価値観だ。元よりそう在り続ける事など出来

ない。個人の意思とは関係なく、何もかもが変わっていくからな。そして、変わっていくからこそ維持することが出来る。美しい過去の現身に幻想を委ねても、それは進化ではなく単なる循環に過ぎない。常に同じ規格や理念の元に造られたものが辿るのは、緩やかな滅びの道だ』

橙子が語り終えてから、少し間があつたが、彼女が言葉を吟味したりしている暇はない。

「それで、鮮花は大丈夫なのか」

『結界の大本が消えたのなら、大丈夫と言えるだろうな』

「なんだよその微妙な言い方は。まだ何かしないとイケないのか？」

はあ、と向こうで大きな息が聞こえた。煙草かため息かは判別出来ない。

『先に言っただろう。鮮花がそうになっているのは、人魚が起因ではあるが直接的な原因じゃない。自分の意思でそうしている。人間は自分の意思で眠るが、快眠だろうとそうでなからうと、自分の意思ではなく半ば不可抗力的に覚醒するものだろう？　そういうことだ』

「そういうことだ、って、何を暢気に。その起こす方法がわからねえから困ってるんじゃないか」

『何をそんなに慌てている？　普通の方法でいいじゃないか』

「普通って」

おれは魔術の心得なんか全然ない。魔術師の基準で普通なんて言われても、おれには全然検討もつかない。

焦る気持ちをよそに、橙子はいつにも増して暢気に、確かにシンブルでとんでもないことを言い出した。

『キスでもしてやればいい。眠り姫を起こす方法としては、一般的だろう？』

「はあ！？」

そんなこと出来るわけが　いや出来るが、しちや駄目だろう。

『何をうるたえている？　安心しろ』

「何をだよ」

『私の印象では、お前のことはまんざらでもなさそうだな。それじゃあ、そろそろ切るぞ。今回の件で少し確認しなければならぬこともあるしな』

「お、おいちよつと……！」

切りやがった。

携帯からは、ツーツーと虚しい音だけが響いている。

まんざらでもない？

鮮花が？ おれを？

「ホントかよ……」

ぼうつと虚空を眺める美貌に目を移す。

心なしか顔の生気が増したような気がする。

半開きでやんわりと膨れた唇は、まるでそれを待っているようにも見えなくもない。多分錯覚だけど。

考える。

もちろんやらなきゃいけないんだが。

訓練された救急隊ですら、人工呼吸には躊躇いを感じるというが、それに近い気持ちかもしれない。

役得よりは、畏れ多い気持ちが先にくる。

……やるの？ マジで？

困ったことに悩めば悩むほど、鮮花の唇がそれこそ禁断の果実のように美味しそうに見えてくるから困った。

「ホントかよ」

もう一度口にする。

大きく深呼吸してから、洗面所にいつてもより念入りに歯を磨いた。

「……よし」

よくないけど、いいことにしておく。

もう何の覚悟かわからない覚悟を決めて、おれはベットの鮮花に向かって屈みこんだ。



エピソード 黒桐鮮花

じんわりとした、柔らかい熱さを感じた。

それが何かはわからなかったが、悪い感じじゃない。

もしかすると、わたしがどこかで求めていたものかもしれない。

ソースの匂いで目が覚めたのは、多分初めて。

直前まで何か非常にむかつく夢を見ていた気がするので、その素朴な匂いはわたしを少し癒した。

自分一人の力で立てる振りをしながら、心のどこかで誰かに助けて欲しいと願っている。そのくせ何かにつけて悲観的で、被害者面して行動しようとしなない人を遠くか近くか距離感がつかめない場所ですつと見ている。そしてその人物がどうやら私なのではないかという予感がしたところで、起きた。起きてよかった先を見たくない夢だったから。

でもすぐに冷静になる。ここは、どこだ？ わたしは生活をしているアパートに同居人はいない。食べ物の匂いや人の気配のする朝からは、ずっと遠ざかっていた。

慌てて身を起こす。

「お、ようやく起きたか」

玄関口の隣にあるキッチンから、焼きそばを持った男がやってくる。

桃園寺梓記。2年前、橙子さんに連れられて、わたしの前に現れた男だ。

そして、実はかつてわたしの同級生だった男。

事故にあい記憶に問題がおこって、それを忘れていらっしゃるけど。なんか、それにしても腑に落ちない。本人は本気でわたしのことは覚えてないみたい。

背が高くて粗野な、男らしい男という印象も全然変わらないのに、

過去をすっぱり忘れているっていうのは、何かおかしいと思う。

過去が変われば人格も変わるものだと思うけど。

しかし、それとは無関係に、兄はよくもこんないろんな意味で、いい加減な男を気に入ったと思う。

名前がシキだからだろうか。全てではないにしても一因としてはあるような気がする。

「具合はもういいのか？」

問われてわたしはふと我に返る。彼が何の事を言っているのか、いやそもそも……。

「ここ、どこ？」

「おれの部屋」

一瞬、息が止まるかと思った。

「なんで？」

「地下鉄から戻ってくるときに倒れたんだよ。暑さにやられたとかだと思っけど。事務所は一人がけのソファしかないし、狭いから仕方なくつれてきた。ま、大丈夫そうでよかった」

「あ……そうなの」

おそらく、心配していたのだろう。

「焼きそば食べる？」

差し出された皿を受け取る。キャベツとニンジンと、牛肉ではなく鶏肉が乗っている以外は、ごく普通のソース焼きそばだった。貧血で倒れた相手に食べられるものかと思ったが、それは彼なりの善意として受け取った。

というか彼が、見た目だけでも普通と言える料理が出来るのは、少し意外だった。

調子に乗るし、気に入らないところもあるけど、悪い人はないのはなんとなくわかってる。

「わたし、どのくらい寝てたの？」

彼はカレンダーを見た。

「かなり。三日ぐらい」

あつさりと言われて、わたしは寧ろ冷静になった。

「そう……」

地下鉄の調査にいつてから先の記憶がない。

つまり、私はまた迂闊にも意識を飛ばされてしまったわけだ。

この男の前で寝顔を晒したのは不覚だけど仕方が無い。元はといえばわたしが倒れたのが悪いんだし。

「寝てる間に、あんた何もしてないでしょうね？」

そう尋ねた瞬間、彼の目が一瞬泳いだ。

まさか、

「お前、結構胸あるんだなー」

「しんじゃえ！」

枕を投げつけた。彼はそれを器用に避ける。

「冗談だって。だいたいその質問、イエスでもノーでもおれが悪者だろうが」

相手の立場になってみれば、確かに。一応は助けてもらった立場だし、それ以上の追及はしないことにした。

梓記がベッドの近くの床であぐらをかいた。

本当は今すぐ再調査に行きたいけど、まだ体がだるい。足に妙に痺れるような感覚が残っていて、上手く動けない。

「いや、それはもう解決したから」

「へっ？」

「地下鉄の人魚はおれが倒した。橙子にも報告した」

「あ……そうなんだ」

またしても、というのか。

この誰かにおいて行かれてしまうような気持ち。喪失感、というのに少し似ている。

「どうしたんだよ」

「あ、うん。別に……」

考えても仕方ない。

「気に入らないな」

「ん？」

「なんだか、いつもわたし以外の誰かが、わたしのことを解決している気がする。あの時も式がそうだったし」

「嫌なのか？」

「嫌っていうか、うん、嫌だけど。でも橙子さんの依頼だったわけだし、わたしは何とかしたかった気持ち」

自分でも、なんでこいつにこんな話を話してるんだろうと、疑問に思ったが口が止まらなかった。桃園寺梓記は誠実かどうかはともかく、わたしの話を無視したりはしないだろう。

「ううん。わたしが、何とかしたかった。魔術師として、わたしに何かが出来ることを証明したかった」

偽らざる本音を口に出す度にほっとした。

梓記の方はいつもと取り分け調子を変えた様子も無く、床に座ったまま焼きそばを啜る。

「そもそもさ、鮮花は何で魔術をやろうって思ったんだ」

思わぬところから質問が来た。その質問を、まさか焼きそばを食べながらされるとは思っていなかった。

「そりゃ、式に勝つためよ」

「何で」

「何でって……」

何故か、即答が出来なかった。

「そもそも、ただ勝つなら別に魔術じゃなくてもいいだろ。式さんがいくらすくても、基本は人間なんだし。それこそ亡き者にしたいってんなら、手段はいくらでもある。でも、そんなことをしても、鮮花が得する事って、実は何もないだろ」

わたしが、多分意図して考えようとしていなかった事をずけずけと言ってくる。けど、……そうだ。わたしがいくら強くなって、式以上である事を証明できたとしても、兄が、幹也の気持ちが動くわけじゃない。

それどころか目的が果たされた時点で、わたしは梓記が言うよう

に『失敗』してしまう。

「何で、そんなこと言うのよ」

「なんつーか、お前このところずっと苛々してるみたいだったし。

まあ、予備校のストレスかと思っただけど」

「殺すわよ！」

合格発表を迎えた寮での記憶がよみがえって、反射的に叫んでいた。

「わたしはわたしの力で式に勝つの！ 魔術を選んだのは、格闘技をやるよりよっぽど現実的だからよ」

「うーん」

「何悩んでるのよ」

焼きそばを口元まで持つていきながら、話すために皿に戻した。

「鮮花はそもそも、式さんに勝ちたいわけじゃないんじゃないかってんじやねえかって、思っただけど」

「じゃあ、何なのよ」

彼が焼きそばを噉ってから、

「幹也さんに見て欲しいとか、そういう気持ちで、単に何かがあったただけで、実はその内訳はどうでもよかったんじゃないかって」

「あ……」

それはわたしが無意識のうちに無視していたことにも気づいていなかった、心の奥の凶星を的確に突く言葉だった。

明確に言葉にされて、初めて気がつく。むしろ何で今まで気づかなかったのか、何故目を背けていたのか。他に夢中になりすぎて、単に盲点だっただけなのか。いや、というか。

「何でわたしが兄さんのこと、その」

「……気づいてねーのは、幹也さんだけだよ」

呆れた調子で彼は言った。

そうなのか。えっと、この男にすらバレていたってことか。なんかショックだ。

「けど、わたしは本気で式が憎くて」

ほとんど意地でそう答えていた。

「でも嫌いじゃないんだろ？」

「ええ」

わたしはそこに矛盾はないと思っっているけど、

「嫌いじゃないけど憎いとか、そんな変な話はねえよ。憎はなくても敵、とかはあるかもしれないけどさ。好きとまでは言わなくても、式さんに対してネガティブな感情なんか、本当はないんだ。魔術を選んだのは、幹也さんの雇い主の橙子が魔術師だったからとか、心配されたかったからとか、大方そういう事だろ」

「違う。あんたに判るって言っの？」

「何にも。何となくそんな気がするっただけだよ」

他人事みたい言いながら、焼きそばを食べ終えた梓記がキツチンへ下がっていく。

まったく、梓記、という名前の人はどいつもこいつも、言いにくい事を言ってくる。

そうやって、わかったような顔をして、わたしの前を通り過ぎて行くんだ。

「仮に式の事を嫌ってないとしてもよ？ 一回ぎゃふんと言わせてやりたい、この気持ちは本当よ」

「あの人は『ぎゃふん』とは言わないだろ。まあ、見てみたいけどさ」

焼きそばを載せていた皿をすぐに洗い出す。この男の、こういう姿を見るには、なんか意外だ。

「そんなにこだわらなくても、好きだって男も女も他にいっぱいいるだろ、お前の場合さ」

簡単に言ってくれる。わたしは自分自身の姿を手に入れるために半生を捧げたと言っても過言ではないのだ。そうそう曲げられるものじゃない。

「それに、誰かに好きなんて、面と向かって言われた事無いわよ」  
一応事実だった。というか、学校でもわたしに寄り付く人は案外

少なかったから。

キッチンにいた梓記が意外そうな表情でわたしを振り返り。

「ふーん。おれは、お前のこと好きだぜ？」

……な。

「な、な、なんて事言うのよ！」

「おっ？ 意外と焦ってる」

おもしろおかしそうな表情が憎らしい。

「焦ってない！ ただその、驚いたというか……っていうか、何が好きなわけ？」

「見た目」

「はつきり言うわね……」

わたしも見た目に自信がないとは、言わないけど。

「だって性格は問題だらけだしなー」

「殺すわよ」

「ほら、殺すとか言うし」

お嬢様のくせになー、と付け加える。

生憎だけど、わたしのお嬢様は完全に外付けで、生粋のものじゃない。

「まあ、とにかくさ。幹也さんのことも式さんのことも、本気になれないんだったら、もう諦めた方がよくないか、っておれは思う」  
そんなことは言われなくてもわかっている。

けど、それをやめたら、わたしはこれからどうすればいいのか、わからなくなりそうで　　そうだ。もう、とつくにわたしは別に兄に固執しているわけでも、式が憎いわけでもない。

ただ、それが無くなることで、自分が否定されるのが恐ろしかった。

いつの間にか兄を、黒桐幹也を見ていない自分が自分でないと、思い込んでいた。

なんて

なんて失礼な恋愛感情だろう。

「変わらないものの方がさ、少ないわけだし。ほら、式さんだって結婚してから丸くなって仕方ないし」

長く伸ばした髪。

お嬢様然とした格好。

魔術。

礼園への転校。

わたしはあまりにも多くの自分を、兄に費やしてきた。けどもういいんじゃないかと思う。

変わってしまったても、いいような気がする。

今までのわたしにも、なんか飽きてきた気がするし。

「そうね」

わたしは長い髪を撫でた。

寝ていたせいかわ、乱れて、ぼさぼさで、実はとんでもなく恥ずかしい姿を、桃園寺に見られているのだという危機感が、今更のようになんてきたけど。

そんなことは気にならないくらい、今は妙に晴れやかな気持ちだった。

変わってしまったえばよかったのだ。

ずっと同じ場所で循環するのではなく。

ゆっくりと、螺旋を描きながらも前に向かって。

幕間

地下鉄のベンチに二人の女が腰掛けている。

一人は黒い髪の、今にも折れてしまいそうな印象のある女だった。大きく膨らんだ腹を、大事そうにゆっくりと撫でながら、何かうわ言のようにぶつぶつとつぶやいている。

もう一人は赤髪で長身。

各々の姿も去ることながら、その組み合わせが目立つことを前提にしているようなものだったが、車掌を含めた通行人たちはまるで



彼女たちが最初からいなかったかのように通り過ぎていく。

おそらくは、そこで交わされたやり取りは全て、彼らにとっては無かったものなのだろう。

「君が、あの人魚の本体だな？」

黒い髪の女が、隣に座った赤髪をようやく、気するそぶりを見せた。

赤い髪の女　蒼崎橙子は淡々と話を始める。

「私は君が襲った女の子と、君をバラバラにした男の知り合いだよ。名乗るほどのものじゃないし、君の名前にもあまり興味がない。無駄は省こう」

赤い髪の女は既に、袈<sup>かなえみゆ</sup>三由という女の名前を知っていたが、それは単に調査の過程で見つけた情報で、彼女にとっては名前ではなく対象の名称に他ならなかった。

「二、三聞きたい事があってね。まだこちらの言葉は使えるのだろう？」

女はパクパクと口を動かしたものの、その言葉は橙子の耳には届かない。

「既にズレ始めているか……。わかる言葉だけ選べないのか？」

橙子がそう促すと、喘ぐように動いていた口の動きは落ち着き、やがて声を発した。

「……久しぶり、人と話したのは」

まるで立つたばかりの子供のように、拙い話し方だった。

「心細かったか？」

「いいえ」

「では、心細いと思わない自分を恐れたか」

答えはない。

何かを話そうとしている素振りがあったが、橙子にその意思が伝わることはなかった。彼女からは、既にこの世の言葉は失われている。

「人とは、端的に言えば言葉の存在だ。まず初めに、光あれと言っ

た誰かが、私たちを私たちたらしめているのだ。自分が人間であるという信仰をやめた時点で、君に人としての未来はなくなつたわけだが――

橙子はポケットからソフトケースを取り出した。銘柄はチェリー。タバコを吸うという行為自体を趣味にしている彼女にしては珍しく、自分の好きな味のものを選んだ。

日本のタバコとしては重めで基本的には辛い部類。酸っぱい、という表現が一番しっくりくる味だと橙子は思っている。

「タバコ、吸わないでよ」

だが橙子は構わず吸い続ける。

既にこの世との交わりを絶っている彼女には、過去の言葉を再生することしか出来ない。

タバコが何故嫌いだったのか、その理由もわからないに違いなかった。

「私は君がこれからどうなるかには、あまり興味がない。手の施しようがないからな。君の体も人格も、既に再現するのは不可能だ。だから、今日は過去の話をしにきた。私の質問に、自分の知っている言葉で答えてくれればいい。何故、君はここにいるのか」

吐き出した煙が、空中に溶けると、彼女は口を開いた。

「兄を想つて東京に来た」

まるで再生スイッチを押されたテープのように、ゆっくりと話し始める。

「間違いなく愛し合っていたはずだった」

彼女はその細い手で、大きなお腹を撫でる。

袈縯の家は、今は社会常識の移り変わりとともに廃れているものの、血の濃い家であるということは、橙子も把握していた。

彼女はその末裔であつたのだが、一年ほど前に失踪し、兄を追つて上京していた。

「けれど兄は遠くへ行ってしまった。知らない、私以外の誰かと。こんなに苦しいなら、愛さなければよかった。裏切られるぐらいな

ら……信じなければよかった」

「そこに道があるという時点で、進むこと拒否することは出来ないよ。残念ながら、その進んだ道に応じて罪を背負うしかない。逃れることはできないし、得ようとする限り、失わないこともない」

「彼は……永遠になれると言った」

「それを信じるのは愚かなことだよ。この世に絶対なんてものがあるとすれば、それは壊れることだからな。従って浮世に永遠はない。君が今こうしているにも、引き込んだ女たちを糧にしなければならなかった。もう今更ではあるが、君の望むものは決して手に入らない。甘い夢を見続けるにも、対価がいる」

返事は無い。彼女にはもう未来を選び取ることは出来ない。

糧を得るための器と結界を失い、ゆつくりと崩壊を始めている。

「まあ、いい。私としては、本当は君に人を忘れさせ、新しい器を与えた人間を聞きたかったが、もう時間もないようだ。何か、心残りがあれば聞こう」

「……お花。部屋に置いたままになってる。郊外のアパートの三〇二号室……。世話をやめて枯らしてしまうなら、寂しいなんて理由で、買わなければ……よかった」

「……そうか」

ずっとお腹を撫でる動きを繰り返していた手が止まり、だらりと宙に垂れる。

それを合図に彼女の体は崩れて、ベンチから落ちた。

橙子はそれを見て立ち上がる。

今まで何事もなくホームを行き来していた人たちが、突然出現したそれに気づくと、あたりは騒然となった。

あっという間に人の輪が出来る中、たった一人、赤い髪の女が去っていったことには、やはり誰も気づかなかった。

終幕

一週間前の午後、件の地下鉄駅ホームで、女性の変死体が発見された。

痩せ細った肢体の股が大きく割れて、そのあわいから大きな肉の塊が生え出ていた。

その有様は一見して人間とわからないぐらい異様なものだ。

後の調べでどうやらその肉塊は、その女性の赤子の成れの果てとということがわかったが、一体何故そのような状態になったのかはわかっていない。

その遺体は、死後数ヶ月経過していたが、いつから駅構内にいたのかは不明だった。

場に居合わせた人が皆口を揃えて、何もいなかったはずの場所に突然死体が現れたと証言し、普段から駅を利用していた人も、誰も気づかなかったという。

そのために、いつどのように彼女が死んだのか、事件は謎のままという状況が続いている。

その謎めいた要素を、続いていた電車への飛び降り事件とかこつけて、呪いではないかと騒ぐところもあったが、もちろん関連性が見出せるわけもない。

真相は知られることなく、ただ異質な事件として消えていくのだろう。

おれはその後もしばらくその事件のことを気にしていた。

関わった事件ではあるし、鮮花のこともあったし、何より本当に終わったのか、各章がもてなかったからだ。

「まるで海から陸に上がり損ねた魚のようにも見えた……か」

おれは今朝、事務所に来るときに買ってきた週間誌を閉じて、机に置いた。

この事件に関すること記事を読むのは、今日で最後にしよう。

何故なら今日から、幹也さんが戻っているからだ。

少し事務所自体もばたばたしている。

幹也さん不在時にためた仕事を消化したり、一緒に顔を出した式さんが娘の未那ちゃんを抱こうとする度に、死ぬほど泣かれて泣きそうな顔をしたり。

慌しさ以上に事務所自体が、物理的に煩かったわけだが。

そんな雰囲気を一瞬にして冷やしたのは、唐突に響いたドアロックのテンキーを押す音の後に現れた一人の少女だった。

一体彼女が誰なのか、多分一見ただけでは全員がわからなかった。さらにそれだけでは収まらず、

「おはようございます、義姉<sup>ねえ</sup>さん。今日はこつちに用ですか？」

なんてことを口走った。

「……鮮花か？」

おそるおそる口にする式さんに、

「そうですけど？」

何もおかしいことはない、と言わんばかりに答える鮮花。

それは、それが当人にとっては何も変じやない。

けど、長かった髪をばつさり切って、あろうことか式さんを「義姉<sup>え</sup>さん」と呼んだのが鮮花だとは、誰も思っまい。

幹也さんは、一見いつもの調子だったが、驚きを隠し切れてはいなかった。

式さんに至っては「え、え……？」とか、「どうしよう」とか、おれに小声で助けを求めるぐらい、うろたえまくっていた。面白いので、記念に事務所のデジカメで撮影しておいた。

明日の天気を本気で心配しないといけないぐらいの豹変だった。けど、もしかすると人間が変わるということは、本当はこういう風に脈絡もなく、計り知れず唐突なものなのかもしれない。

そういうことを過去にしながら、どんどんそれが当たり前の現実になっていく。

おれのいまいち繋がらない記憶も同じように。

過去がわからないことを過去にしながら、桃園寺梓記という人間が進んでいくみたいに。

それは仕方のないことで、そして同時に喜ばしいことなんだろう。「鮮花」

「何？」

「可愛いじゃん」

短く切った襟足を指す。

彼女は何とも言えない表情を浮かべてから、少し不機嫌そうにそっと顔を逸らした。

了

## 第一章（後書き）

原作でスポットのあまり当たらなかったら鮮花をヒロインにすべくいろいろ画策していますが、鮮花つて元々がサブキアラ気質な上に、ブラコン要素を解消していくと、後付で個性を創る必要があつて結構大変だった……。

序章も含めて、各章どこから読んでも大丈夫なようにしていきたいなあと思っています。

次回は第3章。原作でいう「痛覚残留」梓の話を更新予定で、2月9日（劇場版公開の日付）に合わせて公開します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0294z/>

---

空の境界 完全斯界ファントムズ

2011年12月29日21時49分発行